

ふれあい



1号館2階に患者図書室「さなるの泉」がオープンしました。ご来院されるみなさんが、病気や治療についての知識を得られるように600冊以上の医療関連図書と、インターネットパソコンを備えます。

目次

- ◆ 新看護部長の挨拶
- ◆ 健診を受けましょう!
- ◆ 「看護の日」
- ◆ 浜松市の救急搬送の現況と問題点
- ◆ 災害派遣チームの状況報告
 - ・東日本大震災医療救護班の報告
 - ・奇蹟の一本松

～ ご自由にお持ちください ～

看護師募集中

～ 詳しくはホームページをご覧ください ～

浜松医療センター

検索

○東日本大震災医療救護班の報告

救急科長 加藤俊哉

静岡県を取りまとめに従い、4月14日から18日までの5日間岩手県宮古市に出動しました。筆者、外科医師、看護師2名、薬剤師1名、事務員1名の6名編成です。通常の医療でも多職種が関わるチーム医療が大切ですが、災害医療では特に「ロジスティクス(兵站)」と称する管理・調整業務が重要になります。現地での活動は宮古市立赤前小学校避難所の朝夕2回の回診・健康状態チェック、避難所内救護所での避難住民・周辺住民対象の一般・慢性期診療、重茂半島の診療所・避難所での巡回診療を担当しました。宮古保健所では毎日「宮古地域医療・保健支援チームミーティング」が開かれ、医療チームの活動調整が行われました。

発災からすでに1カ月が経過し、東北自動車道も通行できました。しかし現地の状況はまだまだ厳しいものでした。海は何事も無かったかのように蒼く静かに甞いでいましたが、防潮堤内側のかつて住宅、野球場、工場があった場所は瓦礫の山でした。また宮古市内では主要な交差点でも信号機が復旧していないため、全国から応援にきた警察官が交通誘導をしていました。

我々が対応した避難民は高齢者が多く、表面的には元気でも重篤な持病、病歴を隠している人もいました。また家族を失った悲しみ、将来が見えない不安感、避難所生活のストレス等を抱えていました。体育館の木の床の上での集団生活が快適なはずはありません。我々の一般医療チームの他に、精神科医を中心とする心のケアチームも同時に活動し、専門的な介入が必要な場合は協力して頂きました。

復興にはまだまだ時間がかかりそうです。元々医療過疎地域でもあり、現地で求められているのは、継続的な支援です。なお浜松でも東海大震災に備えて、3日分の水・食料の個人備蓄、避難場所、家族間の緊急連絡方法などを改めて確認しておく必要があります。

○奇蹟の一本松

手術センター 池松禎人

陸前高田市の海岸沿いには高田松原と呼ばれる景勝地があり、七万本ともいわれる樹齢200年を超える松が生えていた。夏になると広田湾に面する白洲では海水浴客が訪れマリレジャーで賑わった。ところが2011年5月25日 我々が訪れた時にはほぼ全ての木が根こそぎ折れ跡形もなかった。3月11日 午後3時20分過ぎ 東日本大震災に誘発された大津波がこの松林に襲いかかり、約一キロ離れた県立高田病院まで運び、窓硝子から病室に突き刺していったのだ。四階だての建物屋上に避難した病院職員は勢いをあげて迫り来る津波になす術が無かった。四階の病室内、首の高さまで上がったところで水の勢いが止まった。しかし苦難はこれからが始まりだった。寒さと飢えに耐えながら救難の手が差し伸べられるのをひたすら待ち、最後の一人が助け出されたのは翌日の夕方であった。私が医療支援で陸前高田を訪れた時に病院職員は市内高台に設けた仮設診療所で懸命の病院復興に取り組んでいた。高田松原に一本だけ津波に流される事なくほぼ無傷で残った高さ30m、樹齢260年の松の木がある。街の人はこれを奇蹟の一本松と呼び、復興のシンボルとして大切にしている。県立高田病院のみならず陸前高田市も東北被災3県も、この一本松のように、残された職員・住民が手を携え、我々国民は周りで復興を後押しして、かつてのあの松原のような繁栄を取り戻せるものと固く信じている。その時に再度この地を訪れこの目で見届けたい。



〒432-8580 浜松市中区富塚町328

TEL 053 (453) 7111

FAX 053 (452) 9217

URL <http://www.hmedc.or.jp>

E-Mail kikaku@hmedc.or.jp

発行：浜松医療センター

新看護部長の挨拶



平成23年4月1日付けで看護部長に就任いたしました松井泰子と申します。看護部長として皆様に御挨拶申し上げます。

看護部は、病院理念である「安心・安全な、地域に信頼される病院」「和と協調」を原点到、患者さんと職員とのパートナーシップを大切に、人と人の関わりを尊重した質の高い看護が提供できるよう努力しております。また、院内の様々な職種と連携協働しながら地域に根差した患者さん中心のチーム医療に取り組んでおります。

皆様に選ばれる病院づくりは、「人材育成」が重要であると考えております。看護部の教育目標は、「地域社会の期待する医療、看護を目指し、質の高いサービスを提供できる看護職員を育てる。」「安全で専門性のある個別的な看護ができる看護職員を育てる。」です。この2つの実現を目指して、教育プログラムを構成しております。また、各種専門・認定看護師の資格取得へのサポートも行っており、現在12分野17名の看護師が院内外で、高度で専門的な看護の知識・技術の普及や指導に力を発揮しております。

終わりに、病院を取り巻く環境は厳しく、多くの課題を解決することが求められています。解決の原動力は、職員一人ひとりが「自分に何ができるか」「何をすべきか」を考え、それぞれの専門性を発揮し行動することであると思っております。看護部長として、多くの皆様との「協調」を大切に医療、看護の質向上に向けて努力して参る所存であります。これからも御理解と御支援をお願いいたします。

健診(検診)を受けましょう!

健診センターでは以下の健診を行っています。

- ・特定健康診断(主に生活習慣病をチェックする健診です)
- ・がん検診(肺がん、胃がん、大腸がん、乳がん、子宮頸がん、前立腺がんの検診があります)
- ・ミニ人間ドック
- ・その他 一般健診、定期健康診断
- ・出張健診(H22年11月からデジタル検診車(胃・胸部兼用)となりました。)

健診を希望される方は、**健診センター**までご連絡ください。

健診センター 053-451-2733

看護の日のイベントを行いました

毎年5月12日(フローレンス・ナイチンゲールのお誕生日)は「看護の日」です。市民の皆さまが医療・看護・介護について考えるきっかけとなるのはもちろん、看護職について多くの方々に理解を深めることを目的に、気軽に「看護」を考える機会を提供し、命・心と暮らしを支える専門性の高い技術、魅力ある職業を伝えるようなイベントを企画しました。

【院内イベント】

- ・5月2日(月) 浜松市立看護専門学校学生によるハンドベル演奏会 ・ふれあい看護体験
- ・「きり看護」写真展 5月8日(日)~5月13日(金)

今年は、次代を担う高校生をはじめ主婦・会社員など6人の市民の方々が参加されました。参加された方は、施設見学・病棟看護体験・救急蘇生AED(自動体外式除細動器)体験により、医療関係者および患者さんとのふれあいを通して、看護することや人の命について理解と関心を高める機会になりました。

【院外イベント】

- 5月14日(土)12:30~16:30 イオンモール浜松志都呂ショッピングセンター

血圧測定・健康相談・栄養相談・健康体操・救急蘇生法AEDの体験・看護の仕事紹介(写真展示)・子ども白衣試着コーナー・「看護の日」記念グッズ配布などを行いました。今年の看護の日・看護週間イベントも無事に大盛況の裡に終了することができました。ご協力ありがとうございました。

第14回市民公開講座「よくわかる!乳がん」開催

- <日時> 9月10日(土) 14時~16時30分
- <会場> アクトシティ浜松コンgresセンター31会議室
- <定員> 380人(直接会場にお越しください)、**入場無料**
- <内容> ・乳がんの総論と外科治療について
・乳がんの放射線治療について
・乳がんのケアについて
・乳がんの化学療法について
- <主催> 浜松医療センター
- <共催> 浜松市
- <後援> 浜松医師会、浜松市歯科医師会
浜松市薬剤師会(予定)
- <問い合わせ先> 企画広報係 TEL053-453-7111
どなたもお気軽にご参加ください。



浜松市の救急搬送の現況と問題点



浜松市消防局によると、平成22年の救急搬送人数は28,850人で昨年より1,423人増加しています。1日平均84件、17分に1回の出動があり、市民27人に1人が搬送されています。浜松医療センターは市内で最も多く5,760人を受け入れています。昭和55年の旧浜松市の救急出動件数は7,670件、平成11年は15,561件です。10年余りで出動件数はほぼ倍増しています。当院でも救急専任・専従医師は筆者1名であり、院内の他科医師の応援を得て何とか運用しているのが実情です。

救急外来をはじめとする病院内の治安も悪化し、警察官が臨場せざるを得ない事例も発生しています。今までも警備員配置、防犯カメラ設置などの対策を講じてきましたが、更に「110番直結非常通報装置」設置のやむなきに至りました。

救急医療は地域の大切な限りある資源です。育てるも潰すも市民の意識、行動にかかっています。地域の救急システム(浜松市夜間救急室、在宅当番医の活用など)を適切に利用するなどご協力をお願いします。

(文責:救急科長 加藤俊哉)